

## 特別展「花開く 江戸の園芸」実施報告

田 中 実 穂\*

### 目 次

- はじめに
- 1. 展示企画の趣旨
- 2. 展示の実施概要
- 3. 展示の構成
  - 1) 各章の内容
  - 2) 展示のポイント
- 4. 広報と関連事業
- おわりに

キーワード 園芸 園芸文化 植木鉢 伊藤伊兵衛 変化朝顔

### はじめに

平成25年度「花開く 江戸の園芸」展は、江戸東京博物館開館20周年を記念して開催した特別展である。本展は、開館以来の当館の常設展示及び特別展示・企画展示において、江戸時代の園芸文化を主題とした初めての展示であった。錦絵や刷物、版本等に描かれ、記録された園芸の楽しみや、現代にも引き継がれる高度な栽培技術は、それが紛れもなく文化であったことを明確に示している。江戸東京の都市生活における文化の保存と継承を担う当館においては必要不可欠な分野であることから、ここに記録し、当館における江戸時代の園芸文化の調査研究や展示活動等の参考にしたい。

### 1. 展示企画の趣旨

「園芸」は「蔬菜・果樹・庭樹・花卉などの栽培、またはその技術」（『広辞苑』）と意味づけられる。栽培された植物は食材や薬となり、衣服に加工され、或いは観賞される等、あらゆる面で人間の生活を支えている。栽培の成果を上げるためには確かな技術が必要であるが、江戸時代には、植物の性質を見極め、植物の性質及び利用目的に応じた栽培方法が蓄積された。その結果、現代にまで続く「園芸」の完成を見るが、従来から認識される江戸文化には、園芸というジャンルは含まれていなかった。

「花開く 江戸の園芸」展（以下「本展」とする）は江戸時代の園芸を改めて文化と位置付けるべく努

\*東京都江戸東京博物館学芸員

めた。展示の構成に際し、以下をポイントとした。

### 1) 庶民園芸と奇品園芸

当時の園芸が展開した方向を表している。「庶民園芸」では、分りやすい美しさの植物が人々を魅了し、その需要に支えられた市場が成立した。対する「奇品園芸」は武士が担い手の中心となり、独特の審美眼に基づいて、葉や茎を観賞対象とし、珍しい品種は高値で取り引きされた。または長崎を経由してもたらされた舶来の植物を栽培し、緻密な記録を残している。異なる二つの特徴が分りやすい展示構成を心がけた。

### 2) 植木鉢の普及と影響

本来は野外に根を張り育つ植物を、手元に引き寄せて観賞、栽培する有効な手段として植木鉢の存在意義は大きい。18世紀前半からの植木鉢の普及は、植物の可動性を大いに高め、人々がより植物に親しむ契機となった。植木鉢に植えられた植物は、売買が容易になり、購入された草花は室内の装飾にもなった。また奇品園芸においては鉢ごとの運搬、比較、記録を通して品質の向上が図られた。植木鉢も日用雑器の転用から、栽培する目的に応じた材質や形など、様々な仕様により作られた。

### 3) 植木屋の存在

全国の諸大名が江戸に構えた屋敷には庭園が造られ、それらの維持管理は植木屋が担当した。庭園に必要な植物を栽培するための敷地を持ち、技術を有する彼らが集まる地域は「染井村ハ植木屋多く種々の植木を造り是を鉢に植て商ふ、此地は霧島つつじの名所にて其紅艶を愛する輩ここへ群遊す、花の頃は満庭紅ひを灌がごとく夕日び映じて錦繡林をなすがごとし」(歌川広重(二代)「江戸名勝図会 染井」)と花を楽しめる名所とされた。19世紀になると、独自に庭園を造成、経営する植木屋も出現した。

### 4) 出版文化と園芸

前項の植木屋を代表する存在として、染井村の伊藤伊兵衛が挙げられる。三代目の伊兵衛三之丞は元禄8年(1695)に『花壇地錦抄』を著し、江戸と京都で刊行された。同書の特徴は植物の種類ごとに、その特徴や栽培方法を平易な言葉で説いていることで、後に数多く発行される園芸書にもしばしば引用される。自らを「染井野人」と称した伊兵衛は、出版の力により「園芸」を植木屋から一般に開放したともいえる。また、明和期(1764～71)以降に出現した多色摺木版画により、色彩豊かな植物の美しさをより分りやすく伝える事が可能になった。展示では多くの木版画により、江戸の室内外を彩った花木・草花と、それを取り巻く人々の表情を表した。

## 2. 展示の実施概要

- (1) 展覧会名 江戸東京博物館開館20周年記念特別展「花開く 江戸の園芸」
- (2) 会期 平成25年7月30日(火)～9月1日(日) 開催日数31日間  
月曜日休館、ただし8月12日(月)は開館
- (3) 会場 江戸東京博物館1階 特別展示室
- (4) 主催 公益財団法人東京都歴史文化財団、東京都江戸東京博物館

- (5) 後援 公益財団法人東京都公園協会、社団法人園芸文化協会  
一般財団法人英国王立園芸協会日本支部

(6) 料金

観覧料（税込）	特別展専用券	特別展・常設展専用券	特別展前売券
一般	800円（640円）	1,120円（890円）	600円
大学・専門学校生	640円（510円）	890円（710円）	500円
中学生（都外） 高校生・65歳以上	400円（320円）	560円（440円）	300円
小学生・中学生（都内）	400円（320円）	なし	300円
20歳	なし	20円（20円）	なし

※（ ）内は20名以上の団体料金

※開館20周年を記念して、平成4年（1992）7月1日から同6年4月1日生まれの対象者については、特別展示と常設展示を20円で観覧可能とするキャンペーンを行った（キャンペーンによる来場者数 1,519人）

- (7) 関連事業「4. 広報と関連事業」の通り  
 (8) 展示資料件数 333件（8月12日・19日に展示替）  
 (9) 来場者数 36,595人（目標人数45,000人） 目標達成率81%  
 一日平均入場者数 1,180人  
 (10) 図録販売数 2,729冊  
 (11) 担当学芸員 都市歴史研究室 市川寛明・田中実穂

### 3. 展示の構成

#### 1) 各章の内容

##### ① 序章 プラントハンターの驚き

イギリスのプラントハンターであるロバート・フォーチュン（Fortune, Robert）は、著書『VISITS TO THE CAPITALS OF JAPAN AND CHINA』（1863、雑花園文庫所蔵）にて、当時の日本における「花を愛する国民性」を記している。「生来の花好き」が身分の上下隔たりなく浸透していることや、それを裏付ける植木屋の隆盛等に驚いている。その驚きは、江戸時代に豊かな園芸文化が花開いていた事を知る現代の我々にも通じている。この章では展示室内の演出として、夜間の植木市における植物や植木鉢の彩り、人々の表情を等身大に再現すべく、その様子を描いた錦絵を拡大したバナーや提灯を掲げた。【口絵24～25】 展示資料としては、フォーチュンの著作を中心に、プラントハンターによる日本の植物の記録、彼らが眺めたであろう江戸の風景を描いた資料を展示した。【口絵26】

##### ② 第1章 花と緑の行楽文化

「四季折々の楽しみ」では、人と植物の関わりが文化の域まで達した様子を、四季の草花を描いた絵

画や、江戸の名所ごとに作られた錦絵により表した。展示資料は、春…桜(上野・墨堤・飛鳥山)、夏…藤(亀戸) 蓮(上野) 蛸(根岸)、秋…虫聞(道灌山) 紅葉(品川海晏寺)とした他、夜間の観賞、正月の松飾り、吉原に期間限定で植栽された桜や花菖蒲、菊が描かれた内容を選択した。あわせて名所一覧の地図と表を作成、掲示した。

「植木屋伊兵衛の登場」「メディアの発達と行楽文化」では、染井の植木屋と大名屋敷との関わりの例とし柳沢吉保(万治元年～正徳4年)が作庭した駒込の六義園の図面を展示した。

伊藤伊兵衛三之丞が著した『花壇地錦抄』全5冊(雑花園文庫所蔵)をはじめ、躑躅を好んだ三之丞と、楓を好んだ政武の手による出版物等により、植木屋が大名庭園の維持管理から独立して植物を商う方向へ転換していく過程を表した。

植木屋伊兵衛の作場はまた、江戸の名所でもあった。その賑わいは『絵本江戸桜』(享和3年)に次の通り記されている。

「染井之植木屋 花屋の伊兵衛といふ。つゝしを植しおびたゝし、花乃頃ハ貴賤群集す。其外千草万木かずをつくすとなし、江都第一の植木屋なり。上々方乃御庭木・鉢植など大かた此ところよりさゝぐること毎日へなり。」

墨刷りによる単色から、多色摺木版画の出現により、植物や名所の情報はより正確に、かつ鮮やかに伝達することが可能になった。その中には、珍しい植物により人々を集めようとする意図も見られる。

「百花園と花屋敷－民間庭園の誕生－」では、佐原鞠塙による百花園(現在の向島百花園)の開園から、従来の花木だけによる花の名所とは異なる演出、百花園の成功に続いて造られた浅草花屋敷や小村井梅園について展示した。

### ③ 第2章 普及する植木鉢と高まる園芸熱

この章において植物は、現地に在って人に訪ねてもらふ存在から、植木鉢に移されて人の手元に引き寄せられ、栽培される存在へと変換する。「植木鉢のインパクト」では、駒込や巣鴨から出土した様々な形態の植木鉢を展示した。

現代は最初から底穴が開けられた植木鉢が販売されているが、江戸時代には徳利や香炉の底に穴を開けた転用植木鉢、または植木屋が販売目的で大量に購入した瀬戸物に自ら加工した植木鉢が見られる。特に後者は底を穿つ際に発生した夥しい破片も存在することから、植木鉢の加工流通を示す資料として、あわせて展示した。【口絵27】

植木鉢が大量出土した染井を代表する植木屋の伊藤伊兵衛については第1章でも触れたが、その庭を



【写真1】第1章の導入部



【写真2】「きりしま古木の図」(手前)  
(雑花園文庫所蔵)

描いた「武江染井翻紅軒霧島之図」（豊島区立郷土資料館所蔵）については、庭の広さや植栽された植物の多様性を明らかにするためにバナーを制作し、来館者に間近に見てもらったようにした。

本格的に普及した植木鉢と植物の組み合わせは、室内外を彩る装飾やコレクションとして扱われるようになる。地植えの松や桜等の花木を中心に景色を見立てた大名庭園にも、植木鉢の棚が設けられ、松や蘇鉄等が並べられた。庶民の生活においては正月の梅と福寿草をはじめ、季節ごとの植物が販売され、購入されて身近に世話をされるようになった。その様子は「暮らしを彩る植木鉢」「商品となった植木鉢」において、植木鉢の植物に親しむ人々や植木市の賑わいを描いた錦絵により示している。



【写真3】第2章 展示の様子

「伝統文化に浸透する草花」では、植物が主に歌舞伎の舞台で重要な役割を果たすなど、物語の鍵を握る存在として扱われている描写を役者絵等により展示した。

#### ④ 第3章 武士の愛した不思議な植物たち

この章では、第2章の「庶民園芸」とは異なる園芸文化として、武士が主な担い手となった「奇品園芸」の世界を取り上げた。

植物に対する関心としては、人間の身体に何かしらの効用を見出そうとする本草学の存在が大きいですが、その研究が進むにつれて、純粋に植物そのものを研究対象とする動きが出てきた。従来から存在する植物に加えて、ハイビスカス（扶桑）やアマリリスといった舶来の植物が栽培、記録される。「武士の園芸」では、担い手の代表的な存在である、旗本の馬場大助（天明5年～明治元年）・毛利梅園（天明10年～嘉永4年）・岩崎灌園（天明6年～天保13年）の著作を中心に展示した。

「奇品栽培の情熱」では、葉や茎に特徴が著しい約一千種の植物を、大胆な描写によりまとめた水野忠暎著『草木錦葉集』（資料番号90207691～97）全7冊を展示した。次に、<sup>おもと</sup>万年青・<sup>からたちぼな</sup>唐橘・<sup>まつばらん</sup>松葉蘭・<sup>ちよう</sup>長生草・<sup>せいそう</sup>錦糸南天等を描いた多色刷物や版本により、花よりも葉の模様や立ち姿を重視し、比較し合い、観賞する、もう一つの園芸文化を表した。

万年青等が植えられた植木鉢には、その品種名にちなんだ柄が施された。例えば「獅子かしら」であれば牡丹模様の鉢が取り合わされる。一枚の刷物に描かれた植木鉢に、同じ柄や形は一つとしてなく、奇品が示す不思議な形状と彩色も豪華な鉢との組み合わせは、自ずと当時の園芸文化の豊さを物語っている。



【写真4】第3章『草木錦葉集』の展示

#### ⑤ 第4章 江戸園芸三花 一朝顔・花菖蒲・菊一

この章では江戸にあふれた数多くの花から、特に人々に好まれた朝顔・花菖蒲・菊ごとに資料をまとめて展示した。

いずれの花も熱心な栽培者により、長年にわたる品種選抜が行われ、実に多彩な品種が生み出された。朝顔は地植えや鉢植えにより、朝の風景に清浄な色彩を添えてきたが、一方では変化しやすい形質を持っている。僅かな変化を観察して選抜を繰り返した結果、元の姿から掛け離れた変化朝顔が生み出された。変化朝顔の作出は、文化・文政期（1804～30）と嘉永・天保期（1848～60）に二回のブームを迎える。その優劣を競い合う「花合」が浅草や茅場町、駒込等で行われ、大田南畝等の文人も関心を寄せていた。

特に二回目のブームは、自らを「朝顔師」と名乗る入谷の植木屋、成田屋留次郎の活躍によるところが大きい。成田屋による変化朝顔の図譜『三都一朝』『都鄙秋興』（雑花園文庫所蔵）『両地秋』（資料番号91211218）からは、変化を極めた形と色の朝顔が、江戸だけでなくその周辺地域にまで広がりを見せていた事がうかがえる。

花菖蒲の品種改良は、京都町奉行等幕府の要職を務めた松平定朝（安永2年～安政3年）の尽力により大きな飛躍を遂げた。定朝が作出した品種は300に及ぶとされ、その中のいくつかは、今日なおも存在する。作出された花菖蒲を元に堀切に花菖蒲園が開園し、江戸東京の夏を告げる名所として現在も人気を博している。関連資料として、尾張藩主徳川斉荘より、当地域で一番古い花菖蒲園である小高園に下賜された「日本一菖蒲」「草花」の双幅（個人蔵）や、花を上から鑑賞する江戸花菖蒲の姿を描いた錦絵、花菖蒲を背景にあしらった役者絵等を展示した。



【写真5】第4章 変化朝顔の図譜一覧

元は中国からの渡来植物である菊は、日本の気候風土に適合し、多くの人々に愛好されてきた。江戸時代にはその栽培熱が庶民にまで拡大し、新しく見出された品種は高値で取り引きされた。錦絵には、庭先で地植えの菊に支柱を添えたり、輪台を使用して花の形を整える様子が描かれる。菊には大菊・中菊・小菊という大きさによる種別と、厚物や管物・丁子等、咲き方による違いがあるが、江戸においては、花を咲かせるだけでは飽き足らず、特に中菊に芸を持たせる栽培が行われた。植木屋が多かった四谷では、一週間おきに花合が行われ、順位表が発行された。また接ぎ木に適する性質を利用して、異なる品種を一本の枝に接ぎ合わせる技が披露されたり、花持ちの良さと曲げに強い事から、菊人形が盛んに造られた。特に菊人形については、染井や巢鴨・駒込の植木屋による人形や風景の造作が人気を呼び、見所を示した地図やプログラムが作成され、多くの人々を呼び込んだ。本展では、花を使った代表的な興行である菊人形を再現するべく、田口人形店（面六）に歌川豊国「菊乃細工物 市川団十郎・瀬川菊之丞」（国立歴史民俗博物館所蔵）を立体化した等身大の菊人形の製作を依頼（菊は造花を使用）、会期を通して展示した。【口絵28】

#### ⑥ 終章 園芸文化の明治維新

鎖国から開国、文明開化へと続く時代の流れは、西洋文明の象徴としての花である薔薇に人々の関心を引き寄せていった。元々薔薇は日本にも自生しており、植木屋を描いた錦絵にも描かれているが、第4章で取り上げた花々とは異なり、積極的に栽培、品種の改良が行われた形跡が見られない。『百花図纂』（天保6年 雑花園文庫所蔵）に描かれた薔薇は、あくまでも薬用として記されている。

その中であって、勝川春好（二代）画の「薔薇図」は、大判の画面に薔薇のみが描かれた大変貴重な一枚である。明治時代を経て現代に続く薔薇の人気を予測させるような錦絵として、章の展示を区切るアーチの中に展示した。

日本から輸出されて人気を博した植物には、楓や花菖蒲、朝顔がある。展示には海外向けに作成されたカタログから、江戸時代に育てられた植物が海を渡って行く、その動きの一端を表した。

## 2) 展示のポイント

### ① 展示室内

本展の展示資料には光量の配慮が必要な錦絵や多色の刷物、典籍が多いことから、室内照明の制限を行った。あわせて夜間の植木市のイメージに基づき、導入部分及び各章の境界に提灯を使用した。

第4章と終章の間には、薔薇をイメージした赤色のアーチを設けて、園芸の歴史における新たな植物の出現を表現した。またアーチの足元に仕掛けたダマスクローズの香料により、来館者の嗅覚に訴える方法を試みた。

### ② キャプション

展示キャプションについては、右図及び下記の通り制作した。

（実際は黒地に白文字仕様）

① 本展における通し資料番号

② 資料名

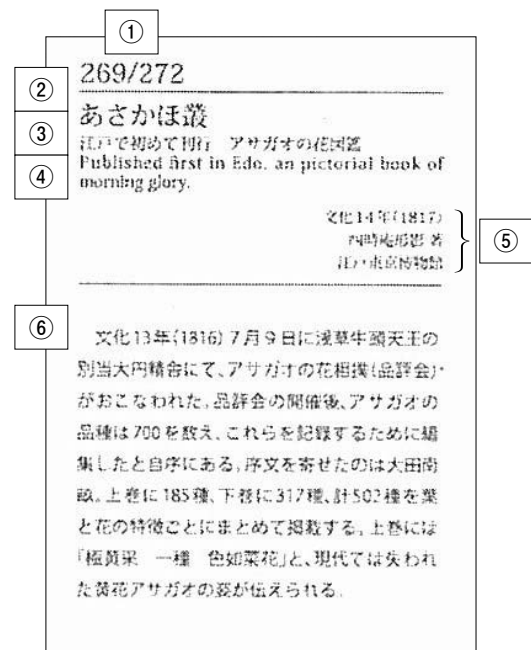
③ 資料の一言紹介文

名前だけでは内容が判然としないため、全ての展示資料に付与した。アイキャッチとしての役割、及び資料名の英訳にも有効であった。

④ 資料名の英訳

⑤ 年代・作者または著者・所蔵先

⑥ 解説文（最大200字程度）



【写真6】終章の導入部



【写真7】章ごとに設けた提灯の造作





4. 広報と関連事業

1) 広報

① 印刷物（ポスター・チラシ）

【図版2】 チラシ表面・ポスター共通



【図版3】 チラシ裏面



広報における本展のメインビジュアルを、葛飾北斎「菊図」（一般財団法人北斎館所蔵）とした。双幅に描かれた菊の迫力あふれる姿は、栽培・観賞という園芸の楽しみと高度な栽培技術が具現化されている。チラシ表面（ポスター含む）・裏面に配置した資料は次の通りである。

【表面・裏面共通】 ※全体または一部

葛飾北斎「菊図」弘化4年（1847）一般財団法人北斎館 所蔵

歌川国貞（三代豊国）「四季花くらべの内 秋」嘉永6年（1853）個人蔵

【裏面】

勝川春好（二代）「薔薇図」文化12年～文政2年（1815～19）個人蔵

歌川芳虎「団扇絵 上臈の松の雨」天保4年～弘化4年（1843～47）個人蔵

関根雲停「錦糸南天 蘭字鉢」江戸時代後期 雑花園文庫蔵

松平定朝「花菖蒲画賛」安政2年（1855）雑花園文庫蔵

水野忠暁撰・関根雲停画「小不老草名寄七五三」（一部）天保3年（1832）雑花園文庫蔵

## ② インターネット

本展公式のホームページを、平成25年5月20日から9月2日まで運用した。ホームページには展覧会の概要の他、本展ナビゲーターによるツイッターにより、関連事業の通知や植物についてのエピソードを掲載した。また、変化朝顔コンテストの投稿枠を設けて、実際に栽培した変化朝顔の画像を募集、ホームページ閲覧者による投票を行い、得票が多かった投稿者には表彰状を授与した。

## 2) 関連事業

本展は園芸を主題としており、かつ開催期間が学校の夏休み期間にあたる事から、実際に植物に慣れ親しんでもらう事業案が上がったが、館内においては生体の持ち込みが禁止であることから、下記の通り行った。また前売券の購入時に変化朝顔の種をあわせて提供し、その栽培成果を展覧会公式ホームページ宛に投稿するよう広報した。変化朝顔の栽培については、後援の公益財団法人東京都公園協会のご協力により、協会職員等による講座を、種蒔き時の5月に向島百花園（墨田区）・神代植物公園（調布市）・清澄庭園（江東区）で実施した。



【写真8】変化朝顔栽培講座で用意された鉢など（向島百花園）

なお関連事業の一覧は下記の通りである（講師名は敬称略）

### ① 記念講演会「江戸の園芸文化－将軍から庶民までの楽しみ－」

日時：8月10日（土）午前10時30分～12時

講師：小笠原左衛門尉亮軒（園芸研究家） 会場：ホール 参加人数：235名

### ② 都市歴史研究室シンポジウム「江戸の園芸文化－環境と観光－」

日時：8月10日（土）午後1時30分～5時30分 会場：ホール

講師：秋山伸一（豊島区立郷土資料館）「植木屋の庭空間をあるく」

市川寛明（当館）「園芸の普及と園芸市場の形成」

日野原健司（太田記念美術館）「浮世絵に描かれた園芸文化」

岩淵令治（学習院女子大学）「武士の園芸」

平野恵（台東区立中央図書館）「本草学からみた園芸文化のひろがり」

参加者数：415名

### ③ えどはくカルチャー

#### ① 「花開く 江戸の園芸」展の見どころ 8月2日（金）講師：市川寛明

参加人数：113名

#### ② 漱石文学作品に見る江戸東京の園芸文化

－『三四郎』の菊人形、『行人』の変化朝顔 8月9日（金）講師：行吉正一

参加人数：106名

時間はいずれも午後2時～3時30分

④ 「巨大花絵巻」に折り紙の朝顔を咲かせよう！

会期期間中を通して実施 会場：学習室1

⑤ ワークショップ「朝顔折り紙教室」

日時：8月3日（土）～4日（日）

17日（土）～18日・8月31日（土）

～9月1日（日）

講師：高井弘明 会場：学習室1 参加者数：計360名

⑥ ワークショップ「紋切遊び教室－オリジナル団扇を作ろう！－」

日時：8月10日（土）～11日（日）、24日（土）～25日（日）

講師：下中 奈穂 会場：学習室1 参加者数：計271名

⑦ スタンプラリー（公益財団法人東京都公園協会との連携事業）

下記10ヶ所の庭園及び公園のうち4ヶ所のスタンプを集めてもらい、本展の招待券をプレゼントした。達成者は384名。

実施時期：6月1日（土）～8月中旬

実施場所：浜離宮恩賜庭園・旧芝離宮恩賜庭園・小石川後楽園・六義園・清澄庭園・向島百花園・旧岩崎邸庭園・殿ヶ谷戸庭園・神代植物公園



【写真9】巨大花絵巻に咲いた朝顔

## おわりに

本展は当館における初めての「園芸」展示である。園芸が今なお日常生活において幅広く行われている事は、展覧会開催にあたって心強くもあったが、一方で、資料に表れる当時の園芸と、現代の園芸、ガーデニングとの距離を縮める事は困難であった。現代の園芸における技術は既に江戸時代に完成が見られる例が多いが、その技術の高さや植物に対する眼差しの確かさを、いかに現代の園芸の現場とシンクロさせられるかが今後の課題である。

また今回は、園芸という視点で植物を扱ったが、植物の持つ多様性は、園芸さえも一つの切り口に過ぎないことを教えてくれる。ただし植物と人間の長い関係において、人間から植物への積極的な関与が園芸でもあり、自ら選択し、育てる事の喜びが生活、ひいては時代をより豊かにする可能性もあるだろう。生体が基本である植物を博物館で表現するには様々な制約を伴うが、本展を契機にして、当館における新たなジャンルの開拓に努めたい。

最後になるが、本展は貴重な資料をお貸し出しくくださった所蔵者をはじめ、関係各位のご協力あってこそ開催された。ここに改めて感謝の意を申し上げたい。